

## 劇場専属舞踊団検証会議（第1回） 意見まとめ

日時：令和元年6月6日（木）13:30 から

会場：新潟市音楽文化会館

### Noism への評価について

- 非常にレベルも高いし、芸術性も高い。しかしレベルが高すぎて一般的には分かりにくい面もある。
- 評価に関して、行政的な視点のほかに、市民からの視点を評価に加えてもよいのではないか。そのために声をどのように拾っていくかということが重要。
- 自治体が多額の支援をして、芸術監督を置き、アーティスティックな作品を打ち出しているところは、日本には少ない。
- 税金を投入して尖ったカンパニーを持っているということのシビックプライドを持てるかどうか重要。
- 今後も永続的にダンスカンパニーとして継続していくのか、あるいは新たなカンパニーを迎えるのか。もしくはダンスの教育・育成に特化する機関として続けていくのか。そういった方針を市と財団が決めていくことが、評価をするうえで必要。
- 長年培ってきた Noism の軌跡はりゅーとぴあの歴史であり、大きな財産である。
- 質の高いものをやりすぎて、幅広い活動はできていない。
- 金森氏は、Noism の芸術監督としては、一定の機能を果たしてきき、舞踊部門の芸術監督としてはほとんど機能を果たしていない。
- 「地方から大都市に向けての新たな舞台作品の創造・発信のネットワークを形成する。」と「活動を通して、新潟における舞踊の普及・育成などを図り、市民文化の振興に貢献する。」という2つの設立目的の達成度が不十分である。

### 活動のあり方について

- 行政の支援を受けて活動している以上、地域貢献は、ある意味義務なのではないか。
- ワークショップを実施するなど、地元の人と交流を深めていくことで集客も違ってくるのでは。
- もっと教育との接点をもうけたほうがいい。
- Noism を辞めたダンサーと連携はないのか。関係が途切れてしまっているのだとしたら、改善していくように働きかける必要はあるのではないか。
- Noism と市民をどうつなぐかということを経営する人が必要なのではないか。
- 契約を継続するとしても、行政並びに財団との関係は、かなり従来とは異なることが前提になる。
- 本当は市民から声が出て、やはり Noism は残してほしいというのが一番の理想型。
- 練習場所が不足しているためスタジオ B の占用について、舞踊・演劇関係から不満が出ている。
- りゅーとぴあで Noism 以外の舞踊公演が見られないことについての不満は特段聞かない。

### ガバナンスについて

- Noismの話と、芸術監督制度、りゅーとぴあ、市の関係という行政機構的な話と舞踊振興の話という3つレイヤーがあり、この会議ではNoismを主に取り上げているが、それぞれが密接に絡まっている。
- 予算の執行に関して、権限的には会館にあっても、事実上、Noismのみで決定しており、会館で内容の精査ができていない。
- 財団とダンサーが個別の委託契約をして事業を実施しており、Noismが財団内の組織として定められていない。
- 本来的に考えると、舞踊部門の振興のための予算が、Noismの活動費のようになってしまっていることが問題。突出した活動として打ち出しているから、シビックプライドにもなるし、新潟のためになっているという論理は成り立たないことはないが、それを万人が認める状況になっていない。